荻屋集

836
3
24

国立国会図書館　　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24

ガラス使用

荻屋集

春部

一

836
8
24

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24

ガラス使用

帝國圖書館

大正
9. 6. 17
購求

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』 請求記号 836-24

ガラス使用

をほかにえらびおきのまほしくおもふなり

速水行道志るす

三百五十六

荻廼舎集巻一

速水行道

春部

年内立春

あつさゆきたるはこゝろさへかすむるくれゆくとしもおもひのこらし

いちはやきかすみのたつにおもはれしはるのこゝろもあはれなるらむ

まだしらぬとしのうちにはるはきてあやなくはるはきぬらめ

元日

世の中はあらたまれともなにことにあらたまるはるのきたるはまことにかな

うつせみの世の人みなのつゝへてまちわかる春へるをくハまかせし

元日雪

この世はみてゆきハふきのなりまさるくもの行きそはるとしらるゝ

立春

あまのとら日のけのひかりいて神代ながらのはるハきにけり

みちのくの人のこころもおのつからはるとなれはゆくたるへきのみちかなり

立春霞

うちひさすいまもつけねとはるのきみなるてるやはるの来るらむ

むさし山ハそのままかすみわたりけることはなけれとかふハかれて

初春鶯

はるいつる神山のみねにけさかゝるてはるとしらする鶯の声

初春霞

たなひきのまたにも立そむるやまのみねの雲のはしてまつこえになる

腹赤清贄

あさまつるなからのはしにまかせてまつあらたまのとしのはしめ

春氷

はるの世をまつかせふきてあさまのあさからぬつるかはからきかひ

氷始解

いはひきのまちかねしひろけれともゆかれいてるたまかはの

こほりをおりのはらなる立そめぬらふもきかくはるはまるらむ

氷解

白馬節會

子日

子月友

震

胡震

山震

胡山震

暮山霞

ゆふされはいつしかかすみのたちそひてむらさき山乃うすくきえゆく

野霞

小松ひきわか菜つむ子の袖はへかすむ野のへはるかなりけり

原霞

きゝされはこゑのこもれてあけやらけかすみそわたるしけのゝはら

関路霞

たひ人のゆふあけやらむあふさかの関にかゝりつ乃霞

もゝのふみけりものゝふことにあすの實の名をきく東路のや山

いそのかみへの世たのはるかなる霞きえそのたゝへつるあふ坂の山

水郷霞

まみたゝつゝはなれにさきたちてつきみのみなかにかすみけりなり

海上霞

わたのはらかすみにほひて八潮路乃しほの八百あひはたへあらん

なにはかたゆくへもみえてあしのはらにたなひく霞あけの

浦霞

わかのうらやかすみのたつまつるゝ浪をゆくめらの袖さへのかすみる

わかのうらや須磨のうらなみをこゝへせんかたぶくかすむる浪の海舟

河霞

秩父山流ゆく水の末つゝもいくへのかすみなかめやまつらむ

いつかなけれてゆくらむまさこのはなのあをはのかるいくらし

谷のはらまきのまさくさめつるきぶはのかたちのおもかけの御ゆるあり

いつかうきおもひおもふのまそんけふはる雲のよをつるまちのいはいつ

鶯

わかそのにきつゝあくなるうくひすのはつこゑなれや梅のいと

らえいつとつけふさ志めそうくひすのなけんとのこゑのにほひそれぬ

待鶯

ふるさとのうちかへしめて咲かるうくひすのねをまつやなるらむ

いけのへにいててまちまたれとかはおもひのちなる鶯のこゑ

鶯遅

たえかちなてるをまてて鶯はちらぬおそくもまちかつけるらむ

早鶯

うくひすの声ものちならさつるこゑのかれしそたゝるうくひすの

春なかにけさはまた咲いてぬ梅のえにまつ鶯のはやくなくなる

初聞鶯

きのふまてはつはくらきたけるはなしつるうくひすのはつ声

鶯出谷

うくひすのふるさといてぬるたにへはやかるるはなるそめかなし

うらゝかにあくる春日とのさかやるかなかいてゝうくひすのなく

雪中鶯

雨井鶯

震中鶯

雨後鶯

震中鶯

胡鶯

夕鶯

野鶯

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24

ガラス使用

閑居嘗

梅間嘗

竹嘗

柳上嘗

花間嘗

嘗別

若菜

若菜多

ゆきわけてつむこゝろあかいつのまにつまあへぬまてわかなえてけり

雪中若菜

むら消えはゆきまはゆきをとりそえぬるかわれのなやくもゆるなりけり

きえのこるさちの大野のゆきなかからうるさつむいつかはるかなりと

さらゝひにゆきかきわけてあさいつるさちのかされなふやつまし

ゆきつもりたかまるいまれあるうちわかなわかなたちにまかせてやつむ

野若菜

うつまさ人しつめしはさちの中のわれはなやくのほらはなるらむ

たるはめのなこりのきえるのへそれはなやくちるのまえいきけり

路若菜

ふるさとのにはあれのまちのちへのわかなをやまつみても

いへつとにつみてかへらむ君はまたそこちへのつれもえいてなかりけり

若菜をまつ

そのかみのせりつみのきしにさきもむれてわかないつくるはなつむなり

春雪

野亭後

風さえてゆきはふりきもちかのふやなかのいろさきのいろなる

そまきしまありのとるかせにかる雪もちるかたありあさかうけり

のきはらしあまりたのきえやらてさちもふかくこゆきたふるたまき

きえのこりわかなきえをふるゆきはえるともなきはおのかな

うゑのはなまたきちるをいふかしとみしにそれはあは雪のふれる

かせはえてはるを雪なきよしのゝみねのふきつるをねはいろはきえつゝ

これ人のとをさひあへるもひさゆきなきやまちさかるらむ

夕春雪

たつのまき立もえやらぬ夕のせはえてゆきふりつもるゆふくれの空

野外春雪

おひのはえんのはたのいろみえて雪ふるらんのもむものへかな

みえいてしきのつみなのゆききえてゆきたいのへいあさかりせめ

家春雪

こゝろさしもいまはるゝねにはゆきふるかに やまはのかたちもなし

春雪似花

はなかねてのまちまつ人のこゝろにかはふまたのはきいの花

残雪

ふるさとのゆきのけるからのきのかはしのけはなきとなし

山残雪

あけぼのゝまえあらしの山のはるの雪のまるしらゆき

よしのやまむらきえのこるまたらゆきをはるまもふかきこそ見れ

嶺残雪

秩父嶺のゆきつもりきえやらてたちまちはるきもまたのから

わかなつむそのこるねのまたらゆきをいのちのあはれなるまめつらし

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』 請求記号 836-24

ガラス使用

除寒

除寒氷

除寒雪

二日除寒

栽梅

梅盛

雪中梅

梅風

暎梅

山家梅
窓前梅
行路梅
梅花さく
河ぞひ梅
梅有遅速
梅紅白

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24
ガラス使用

いろにこそちめどもさけ咲むめのはなのこやひいつれならぬ

紅梅白梅香不異

いろなれはかはるかをゝしもにほふをいろにちめどもまる梅そも

ほくいろのにほひことそわれしつのめどいつれやこにゐる梅

正月たつ日に梅園にて雪ふりて

うめはふくるにやそむかせはなきむ月のこよひ雪とぞまし

柳

のとかなる春のころにあをやぎのいとにかけたるへつゆける

糸なかいろそひゆくあを柳いとなかくかれそむらむ

春こそかへるはこのかやならへは花もちる梅柳のいと

あつさのえだはゝのえにおかゝれやなびけばなびくきくらふ

柳未緑新

おのかなきむすひのにほひをあるれやそむるはるのいろやなきのいと

たえそむるやなぎのあをいさゝそしおかいちはやくみえもせん

胡柳

糸かけはかたふくあやにたちそへるなみもえゆるやなぎかけ

雨中柳

ゆきたまつものこゑをはまぬれや柳のいとをつらぬくかな

あをやぎのまゆにこもるはるさえつるにたちまさめのつらぬきかな

柳未随風

門柳
山家柳
故郷柳
水辺柳
河柳
岸柳
行路柳
初午稲荷詣

若草

わか草のいつこはしきとたきあのふるからをのこまつはかりかな

春草

ゆきまこそれやつまのへとわか草のもゆるかくれはらはゆく

かきの根のゆきまにあをくいつるもくちすなはえてにほふ

峯蕨

をりふしのはきひるよそにしつつつまみをふるさとのさわらひ

山人のをちやのこせるはるかにわけける峯のそのはつわらひ

野蕨

たつぬるまかはかくえのをつとらひたつゆきはるきたくへつれ

えたるかりあけはのてらにかるるくさをるものかはつわらひれ

岡蕨

ひなるへてをかやきそくをののへとなえぬかふきやもゆはつわらひ

残つのへにを早見つりかつらひゆきにふりしのつこのほか

山蕨

らやまつまえゆきのこのやまのわらひたちやまとのたのはらつと

樵路蕨

もえいつるをかたこへこといひとのたはさそふる峯のさわらひ

樹陰蕨

たれ生やなきつほるまのはきしりとさ見あらはれる峯のさわらひ

杉嵐

春月

春曙月

宿雨月

春河

春曙

春山曙

山はくらはまださむからしこゝろのみかすみしまさるはるのあけぼの

山家春曙

しらゝのなかはいまもゆきてみむのあさきよはるさめ

水郷春曙

宇治川のかるやなきたにいとゞしくかすみてやまのはしのあけぼの

かすみつゝ小松をはのきしてちゞにつゞのはるさめあさたれはしゆく

つきかけはのきそふとむせ角田川ふねまちわふるはるのあけぼの

春雨

いまはまたやまかつまでとまつかれるおなじはるふるはるの雨かな

たれゆゑをとふへのかよひをやらましとまつとあめのまなるはるめの空

湖春雨

あさやきのにごりやつゝふしつゝむかへたる雪あらぬのゝしめはしらなく

夜春雨

まつのよのしらへもきこえふる雨そゝくいまあしつゝのかるはるのよはなみ

たるはめにふりまさりけらしさよふけてはるのさむさにあるきみまちつ

夜もすがらをとつるかやのこゑこそふけゆくはるの雨はしらるれ

庭春雨

いまそはたいづれつまくしなふるまゝに木のめもえはえにほにぬるゝ

野春雨

はるさめはけふの小雨たつのやつまたちのへとことゝかたみめつゝへまさる

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24

ガラス使用

閑中春雨

しつかなるやとのたのしさひとりおきゐてぬまちの雨のうたな

ふる郷はしのふるきその色そつゆけき春をたのしむ雨をこそしれ

歸雁

たちまちてつきみちくもにゐるつゝ里のたひねのそらやたのしけのなるらむ

こてハゆきちらやあらしとかへる雁のちりしくはなをまちてぬるらむ

歸雁忙

ふる郷のゝちをまたすやいそくらむはなをもまたてかへるかりかね

のとかなるはるのさかりをまたてかへりなはつゆはなにいそくらむ

雁別花

ふる郷にやまもかれぬるみやこかたちらさくらはなちらてかりかねゆくらむ

これ人ハかへてたよりふくれなゐにきてたなさけのかりハゆくらむ

霞中歸雁

かすみたつ花のたちてゆくらむかりはらけのそこにきすさしゆくなり

よるとてぬる雲のせきもうちこえてかはゝれきこゆくものかへるかり

月前歸雁

つきつきもこゝろ秋のかへるそらハいつまてあはれとてやゆくらむ

やまのはにつきみてのほる月のかけハきこえゆくかりのなみたおちる

暁歸雁

あけほのハかへりゆくかりのひとこゑのつきのぬるあれハみさとこそしめる

湖帰雁

たちかへるあかちなへたてゝもかすみのうへにゆくへしらなく

浦帰雁

こゝろのとまりかへるのうらぢあけやらぬのそらのことゝはきこゆるか里このうら

野春駒

のべのはるたちのはらにはいつかのへのやつのこまなきまどふらむ

まこもかるふかれるはるかのしらぬのへのやつのこま

沢辺春駒

みつぬるむはらのへのまこもつのぐみていろめくこまのいばえたつなり

雉

小田のへのたなかにかすみて山つゞく垣根まぢかくきゞす鳴なり

よこゝろの草をわけつるこゑしるくひばりあがりのこゑきこえなり

あらかりけふ山のはらら咲出ぬとやつまのきゞすこゑやたつらし

月のうへにうきて小きこえてかのはるあさのへにきこえなくなり

墅雉

きそれさくのへのむらさきこゝろのゆくかたにきゞす鳴なり

あけぼのにけふもけさむれのかすみのそらにきこえなくなり

やくはらのつまやさらぶらむもゆるあしたのへにきゞす鳴なり

霧はらけこゝろのかおもきてまのきこえくるやのつらさ

雲雀

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』 請求記号 836-24

ガラス使用

夕雪催

呼子鳥

梨花

待花

栽花

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24

ガラス使用

立かへる春のしるしみえねはたれか忍はむ見るへくもあらしあれ

尋花

ふみわけし山ちのをちのあとたえて花のありかはのへのしつけ

たつねこし春のしるしのおくの山まてもひとしの霞たつへき

初花

はつ花のさきそめにけるこころそえてゆめのたえかけてたのむかな

おそかりしみよしの山けさは花のみかほるこそそのたつれ

山花始開

いつのまにひのはきよせしきよき山の木のはら咲きそめけむ

人静見花

さかりなる花のちらはなさるゝ人のなからを花のちるらむ

毎春見花

花ちらすまつとしぬるよはいつらはあめつちのてあらはゆるのみ

馬上見花

はなのかのたゆけはおのつからゆくこころそあちゆきまるなかて

さくらあさくらきんちおきいてそれはいこまの峰それ咲くなり

夜思花

あすもひねのゆめにおもふきはなちるとみてはあからかれそらす

翫花

いかへらつまあをこの世のなかつきてのふるまゝのはなのよはいまた

愛花

あるのひとをそのしけりふは花ならは咲きいてゝ匂ふめんなりなれ

月前花

いきよへる外や此の月は雪をてる花の木すゑや たそかれの空
なかめつゝあかさは花のかけの月のかけも花乃色そのまゝ

霞中花

花ならそれ咲きまさる春霞あさかすみして山のかすみいろそひゆく

雨中花

春されはぬれての雨はおのつから花の上の花のつゆやおもひけむ
よしの山まや花咲めて雨ぬれて雪とちらぬれは花のおつく

花似雪

花ちれはちる木のもとは花ならてゆきなれはめつらしきは花のちりけれ
よしの山花のさかりは雪かとてあやまつははなからなる

花似雲

いつはりに花にならひて花の色はしらくものそらにみえまかふらむ

朝花

あさなさなこゝろをすませのいろそひてあけほのそらに咲ける花かな

夕花

ゆふまあひのくもなからいろこそしつまりたる雲ゐにちれ
ゆふかへるあるのあらしもはとけの山かすみたる花のしらくも

夜花

[illegible]

[illegible]

満山花

[illegible]

遠山花

[illegible]

深山花

[illegible]

[illegible]

嶺上花

[illegible]

関路花

[illegible]

志賀山越

[illegible]

田家花

[illegible]

山家花

[illegible]

みやま人きるともよしの山さくらなるはにほひの花のかけの哉

禁中花

雲やはるかなたにあるあしたから見むこゝのへにさくらは

古京花

みやこにある志賀のやまにいまもなほむかしなからの花を見てへる

ふるさとやへにけれともちの人の花きさやこころあはれけりき

故郷花

ふるさとはおもふるきのはなちるをきゝてきる人もかよはぬるゆゑ

古寺花

ゆふくれのかねのひゝきもかすむ日やかすみのたつせのはなさかりは

依花待客

きえぬるえにあけやうくひすの声にさそはれて人のゆかむと

先見花

おりてみそことにあはれかまさるをれはほめてみるもしらるな

花錦

つみへきとうてやこひてよそみかひのおもひたちきぬものかしこを

落花

よしのはやさくらなれはあの人をなにゝとしてのはなのちるらむ

惜落花

さくらのさかえてしあかせやはるかちるやこゝろさへさかゆきを

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』 請求記号 836-24

ガラス使用

おいせはるこすゑもさそひぬる残花をとむる人はあらぬの花

山落花

いそのかみふるの山へさくら花ふきたつ風のさそひけさはつもる

このもと山たかき嵐ふきそめてのけしきにちるはなやの花

うつろふはいつのまにやらと思ふかならなつかしきもるのやまの花

山路落花

うつろへる花のかけちりまさていかにふりえむ春のやまみち

関路落花

とまる人のいまかあらねかあふさかのせきもる風はとまらやむかしの

河上落花

よしのゆきえせぬもきのちりつもるたまかこすゑのはらぬやちる花

湖上落花

ひらの桜あらしふくらしにほてるなみのはなはしかの海ちら

海辺落花

いそやまのはなふきまくもの世にはるかの浦のつり舟

古京落花

いにしへのならのみやこのあとゝへはならのへちりゆく

古寺落花

ふりかねてはしきやまてらのゆふへのかねにさそはれちるはなか

やまてらはこけのはらのいつれはかねさそはぬやそらに散

月前落花

落花似雪

花前述懐

寄花祝

春情寄花

あいまてふ

野遊

逕日

春日

春興

春山越

春日望山

桃

燕

躑躅

古物堂

雨中菫

たまつくるこのもし草をけさめのふる野のすみれぬれまて咲にけり

摘菫

こゝろをはいさやなましひねもすにつめとあかぬの野へのすみれは

むらさきのゆかりのいろをそめてめる子の袖にすみれのふやつむら草

えゆるのひもいまあさのねつこのさと志はふのすみれそこれゆく

菜花

こてふのあそひめつゝなせハまなのはなのけ色なりけり

うなゐ子かつみからはまてめつらしくかきねのもとの花さきにけり

蜂

これ人のすゝろそらなるなにしけりへたちてふのをなかまとなる

なり垣をこえてちりくふやなきのそれのえたつハちてふなりけり

こゝろにハのもれつまれてもつまるゝちてふハゆめのこゝちするらむ

蛙

うららひにけなかつるゝをやはたのあかしろにつはかたつなくなり

ちけめのきしの山吹うつろひてちりしくミつにかはつなくなり

しつのをのこふゝちまつるなりしろにえやこころえてかはつなくなり

夜蛙

あかつきたちゆふのゝかはことえてしつくの田ゐにかはつなくなる

雨夜蛙

いねつみはいそかしけれとあきふけてえとりのえつの田になくなり

さよふけてそよめくくも山田にきこえつかはつのなきこゆなる

苗代

しつのをのこなからちまつるさまみえはけにたのもあるを田のなからら

おもふ秋のみのこゝろなくなりぬれはのあらそのたねまきはせむ

山躑躅

かもれてはなのきまてもたとられてつゝしにほゆる花のこやまち

山つゝしたく火とえて行人のこゝろにいそねのはしめ

水邊躑躅

にしきかとをしひにいてたつ浪はいはかねつゝしやうつるなりけり

山吹

はるつくやへ山ふきの花のいろにしははるゝいてのかはら

よしのかはちりのふかふけそれてなみたちにこそるゝきしのやまふき

やまふきそはなてらにつきてふかふかるを乃はるをきしふちつて

藤

うちなひくはるのものにてまつのえにかゝりてゆかしは藤なみのえれ

いろ色そやのまちかさやとのかちなみは松のよはひはあえにあららむ

暮春

わかれてゆくなるのなこりをたかなるはゝのをまゆめのちちのこしけて

たのみくもうつろふはなさきにはまてしつこゝろなくはるのゆくらむ

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24

ガラス使用

暮春花

三月盡

三月尽夕

春雲

春松

春歌

春夕

春虫

はきこふるはらの床をぬるてふハつきひふのこゝろてえむら雲

春色

ゆく〱やなきさへつゝそかたりて忍ひもまる〱あやなしもかゝるはるのけしきかれ

国立国会図書館　　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24

ガラス使用

荻舎集

夏冬部

二三四

836
24

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』 請求記号 836-24

ガラス使用

附言

己嘗く訳もし記せる歌文ども漸々積りて十巻ばかり頻を分ちて一巻春二巻夏三巻秋四巻冬五巻恋六巻雑七八巻長歌九十巻文く都て十巻く為べく思しありてうつゝ記し試をつゞく一三七八九の五巻ハ既く成其餘ハ未一冊と為はだりてなからばまバ始く此く合巻ハ為し置くあり猶後ゝ詠もし記も為たらむくハ其巻々ゝ収入て各一冊ゝ為べし然まで夏冬恋ハ自多らねバ夏を春く冬を秋く恋を雑く合せて各一冊く為む

宜るべし倩恋歌のむづく少なきハ已好みて詠ざる。

大正
9. 6. 17

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』 請求記号 836-24

ガラス使用

バなり然るハ荷田宿祢も偽なりとて詠まじけむとして聞
く已にも同意にて強きハ得物し敢けまバなり然れど
人々常に詠も習ひなるを我極く言ハ非ず唯素好き
げる事まて思ひ寄らげる事ハ何にとも思ひ得ざまバ
なり然らバ此に載たるハ如何にと云ハ是ハ若き頃題
を得て詠るが少有つるを拾ひ置るのミ勿怪こそ斯て
此総ての歌文等撰じてきハ非げまバ後に見まバ我な
がら打傾かるゝのミ多有ではまるに棄も得やらでな
む然まど紛にハ撰調へて浄書きべくあらず

行道識

荻屋集巻二

速水行道

夏部

首夏雲

いつしかも霞にかはりてけふそ見る春の名残の雲

山のはにたなびく雲ぞきのふまでは花のかげとみえし雲

夏草深

なつのけてなかはにしげる小ちなさの葉に紛れのなかも猶わかれ

またばかりまたかへとふかきをしきかもやがてちらなみ

惜更衣

なつ衣ふきつましいのちすてられぬなくさまれたつはきさ

花ちらす春の名残りみえし袂かなやなほ

ぬぎかへる衣を思ひ花の袂に心をそへの春のを

去年の花のかたみとまもりてきぬれはぬかへうす人の

このしゐ道へいはゝ花の香のそでにしみけるものとこそ

餘花

風つらくふくとはなしに花はかりあらしとまちいてゝ残

かれはとゝまする花を折しけれはとめたるは風かよひて

新樹映月

このたびの宿とふのかへて待ちかねし月を待ちわひぬ

卯花

しつのめのはなちるぬのさらすなる里の卯の花咲ける垣ねか

やまかつの垣ねの卯つき花はさてなのこるゆきとやまかれつゝ

山家卯花

卯の花の咲かゝるらしやまはとはましなやめたるかなしつ

田家卯花

しつのめの山田にうつる月かけは卯の花のひかりかは

郭公

いと久しいねてぬ夜のはつねきゝいつかたにきく袖しらぬへみ

待恋

まつほとはひとつ心のひとはなしあはぬもわか身なきやといはるるに

恋中恋

ひとつてもいまあらねたきよせきつけたつねなるらむ

夜郭恋

まつる袖ちらた花あすのはなのくものまちまちにほとときす

月前恋

つきのかけいとあはましをたへぬなかやまほとときすなきわたるよかな

恋稀

きのふひのひらてはてかくれなきつきにやかれのちかたる

遠恋

むかしのちやかちまちかたきあすたのめかへるをたまきまくらり

堅恋

なきさてまきぬなかれおもふむしまなきつゆのやまほとりあり

渭中恋

ゆく里こもかき乃ほとときすあるしねの君なきたにもむき

寄落橘

ゆきの花のたれ散る里のほとときすうしやさらむみなれてそなく

橘

つきのたえすきの袖のふつまなきまち花ちるたれのかをるせこころ

朝思橘

うち花の紛れの露をはらひつゝおのかをさへやあらぬものゆゑ

夜思橘

志のたるまくらの香もむかしへとまくらのやゝのよき花

暁思橘

あかつきは月もなつかしき花なれやかなかやゝ

禁庭橘

うち花の志て世をそめていくよふるさとのつゆのかゝるらむ

庭ノ橘

こゝろはふるき志のへとてうちもれのひかりのうへのたかふらむ

社頭橘

たまかきの神もめてけりいかきにふるたち花の花

梔子花

をりゝゝぬなへての花のふしなきとこのなかおもしろくちなしの花

早苗

早苗をたのこかつゝゆまはてまつらきなへとのこゝろ

里早苗

志つのをゝつはあやふしつくるみ田の里はゆふへとるなり

雨中早苗

たなひくもへふる雨をかきたまて志つのをみなきなへとるなり

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』 請求記号 836-24
ガラス使用

五月雨

けさぬいまやらまきはきれのあやめや男たちもあゆらう

菖蒲

はらふなふ千代のためしのあやめ草ねの日の松にひきやならへし

澤菖蒲

いりやめ草あやなきさはにかるる袖おのへのなかのそこにまつ

軒中菖蒲

こそきてひきのあやめをたてきてはつきの雨のけふハのさきれる

池菖蒲

さこ代のためしのなかき池のいけのいはやめ草そくしらす

菖蒲淺深

かきねぬきしほにおほゆるあやめ草なかきなかくおほやまなき

五月雨

あらはれぬまやらぬれぬはるるあふひにいらし露ちらしつつ

やまいのおちのはやくさきこゆなりこかさやまはるさきみたれのまさる

川五月雨

おちあへるミつみなかきやまいのあきの瀬もみえぬさみたれのころ

五月雨晴

なつやいつくもの雨たけて月まちいつる夜をかたりぬる

螢

たるみてまつるいけにはきかたちて思ひにほるるめくりなてましらは

河辺蛍

かは風にさそはれぬるもほたるハつゆもかゝるにみえけるかな

水鶏

はらふなるこゑはたゝぬきの門たてまたたくひなのおとろかすらむ

おとろかすとひなくいそぬるほとになつのよもあけぬるまてあけまちけらむ

夏月

いつみまてのきはのめくなつのよの月をまつまにあけぬなる

あつきさをわするゝまはるくらむよひてまちいてかたひなつのよの月

瞿麦

やまかつの垣ほにあふる志らまのやまとなてしこ咲まなるかな

夏草

志けるからてそへなむのへのはいゆきかよひなからハ花のはくに

野ハはらきこ夜かる志らゝあやぬなり旅ゆく人もたえまゝくらむ

糺川

ふきくたすせのうく舟はなきになく波にてかゝるかゝのよの

いる月のくのまちの辺よかつらにゆくかつけるまかりひのかけ

照射

はつきさ山志けみにたてはつをしかの志まつ袖やなくなるらむ

山蝉

古木のうつせのこ木ハたちけしなきうつ[illegible]

河辺蛍

うち風にやきもくれぬるよしのつゆもかきこえてなるなかり

水鶏

はらひもはねぬ夜の門はきてたゝくなるくひなのおとろかすらむ

おとろかすとひたゝくいとぬるほとはなつの夜をあけやすきにやあらむ

夏月

いつとなきそのきはのめくなつのよの月もまたしき〔…〕ほとはなる

あつき〔…〕のよの月

やまか〔…〕まなるかな

志らる〔…〕のはかなさ

野ハ〔…〕ふらす

村〔…〕

引くたゆむはせの舟はまた波ちるかけそのをけ

いる月のかけもちらへるかつらかはなかれてまかせ火のかゝら

照射

はつきしのしけみにたてはつかさらの志かまつ袖や露にぬるらむ

このまもりつゆけしやすさにまちあかしつるもの

山蝉

いかしきの山のあらしにふきたえてこすゑとよまぬ蝉のもろこゑ

晩夏蝉

なくせみの声もしきりぬなりにけりやまのこすゑに秋やかよへる

遠雷

きえたえせぬもかくは雨ゆふのせみつゆあらきしはのたちまちそふ

夕顔

やまかけの志つのふせやのゆふかほの花のはかなきにほふへきかな

氷室

松のきをしもるのこつ氷室せは夏をしらてそしるのみる哉

みなつきのひむろはしらましやまかけはせかれてきたるおものとそ見

夕立

けふたちてゆふくれもしらむら雲のもる田のすゝしくなるき

泉

あつきひにしらぬかたかたやまかけのいしまのそつたひのかはみなもと

晩夏

つきかけのせきもしるなりぬるかなゆふへのしきのかけにこほる

荻屋集

秋部

三

836
8
24

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24

ガラス使用

秋部

立秋

連水行道

大正
9. 6. 17
購

立秋風

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24

ガラス使用

をきの葉もまつおとつれてそよくなる夜はの風そ秋をつけぬる

立秋露

たやあきの来ぬるを志るらしをきそむるなきあくは葉のはけの志ら露

立秋朝

秋と虫のなくなるをきくぬハあまのまよりそ秋ハ来にけれ

立秋夕

ゆふくれハ常にあはれの身にしみておもひけならん秋に来に経

野立秋

けさミれハのへの花けさにおく露の志らなみやかわ秋をつらしる

浦立秋

なにはえのあしのうらはに秋たちてしらつらきけさのたつ浪

早涼

秋の世のなきの葉もとよるきしはにたやくもなつハのこらけり

早涼知秋

大かねぬる夜な夜な風ふきてぬきさままつそおとろく秋の志るしは

風告秋

きしはふきかハ秋来ぬやつるその世こそうらかなしけれ

なつかやるにはのなきから風ふきてあきをかみやとそうしぬる

幽栖秋来

まかりやるにハ志られぬやかなる我なれに志るものゝ秋の来ぬらむ

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24

ガラス使用

いやしかるよもやはや志ら露のたましきさえて秋は来にけれ

山家秋来

松かせのにはなきやはとかあきの来るけへ見つらきかれ

またきぬる人はなはそ山中のさしきそふる秋も来にけり

初秋月

夜のおもふけ見なやかしきかるゆふのかつちるはなの三日つきのかけ

いとはやふちるかけもしきは山のうの月さやかなる志の秋のかせ

をちのよは志ののなきやまつ月のかけにあきのいろや残

初秋夜

秋の夜てはやふのかるつゆにまつ月のきなる地井のさいほ

初秋露

志けつしゆくすゑも志られてあはれなり秋のあはれちのさの志らつゆ

初秋木

みちかきもる秋のくれきふ志のしあへ行おつるこのきりのけさのいとはやふは

山家初秋

かきアかきあきのいは山のみのあはれきすかこそおほえそ見られ

新秋風

にはのおもの桐のえだはやふにおとろきそふちいてこれは秋のせそふく

新秋雨

きのふのゆふにむらさめそくこゑきくは秋のあはれそまつ志られける

七夕

あまの川あふせたつなゆめあふくみのいまむかしひのあふせやはある

いにしへをおもひやるらむたなはたのちよのゆめのちきりのこして

ゆめうつゝおもひそらにたなはたのけふくるゝらむかさゝきのはし

たなはたのまれのあふせをあまのかはいはまやてるほしのなにながけむ

待七夕

秋来ぬとあふせまつらしたなはたのいはまのはらにふれまちしも

七日夜

よひなからあくるかたあらむたなはたのなかのちきりのいはまあまりしも

織女契

たなはたのちきりはかはりたのへねとひとはゆきかへりたちかへるつらしや

あまのかはながるゝまでをあまのこてそゆくふかひとたのちきりそあけゆけ

よろつよにながれてたえぬたなはたのちきりやそらのいはまのかはなみや

七夕風

あなかしこのまれのあふせのあふさらませはいはくるゝかせをあまのかははかせ

七夕露

たなはたのちきりをおもふまたなくらむそてのしつくのしけのつゆの露

七夕暁

あかはてのわかれとはかなきや いはけりてふまる いはつきのそら

七夕後朝

うちさそふ袖もたもとのいはつぬやすゝしけさハぬるらむ

残暑

てりまさる秋のあつさにくらふれハなかなかなつハすゝしかりけり

おほつかなあつさハなのミにて秋ゆゑはあつきせみのなくなるか

相撲

くゐはやとくゐたふしけむいかしへもちからはゆるけふやかはあらぬ

かちたるをこそみせけらかしたつ人やいそねはなるきぬてのふるまい

萩

そよふくにやつまはけしきをはのかよふの秋にけるまハちはやくらむ

やゝひぬるあたりのまゝに秋くれハをはなやまつるあさつなはき

萩風

はらふなたらう花秋れるをいつまてハをきのおふ風のおとらゑけむ

をきのおふのいさせハはしきとのなかのらうらえまするやまの友とまきけ

風前萩

あたらの世にまつちるをはの錦やなごりをはらふはげしあるらむ

夕萩

ゆふけまハをはのおかけるしいきて世のおのへのやまにふきまさふらむ

いろしくなくはめかぬるゆふくれをおもひまするきをきのうはのせ

ゆふくさきのこゑをきつけハちよらつの秋のいろいまをたもちをきそら

夜萩

いねかてのよはのまくらにおもひつきてなかめきしはきのしらなみ

庭萩

秋のせのたねをうちつけにやなるらむしけくゆるけぬにはのはきはら

山家萩

やまかけはすそのもあきのふのけしきやしるくなれぬをはつせ

葛

なかくにふかきまへらまてもたのあるゝみかあらしのへはくまくなな

岡葛

うしろをもかへらしかの残秋のせよりみのもかなるをゝかくまはら

萩

けさみれはむすひたるつゆもいろつきてひかりくたきのえつらきのれ

おもひくたきのにしきをはをしつれつまかやこゝろかきつくなかれぬる

萩半綻

うちくゆてもるよにまちらる秋はきのふのたかしてゆけるみのけて

萩盛

いたえるつきのまのいりのたまもちらせよ小松のあききは秋いまはかりなか

むらはきのいろにえけて小えたはらふの辺のそらにえうたもかくは

てのかまゆくの井へかなくふるはなをしるかえきのさかりをもちらせくのかなる

こやおしかをまてもかしおもひくたまに萩のにしきけふはからしなか

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24

ガラス使用

庭萩

ゆきゝの人もなくねるや宿のえだのはつ花ゆふのさき〳〵

閑庭萩

さびしさの色はたれにかたらへむ世はなれて人もとはぬ宿のにほふ萩のはれ

女郎花

秋の野にいとゞなまめくをみなへしふるさとはつちの山にゆくらむ

いつまでにつらさふせぎてをみなへしつゆに風をまかせつゝ

風前女郎花

ひとかたにたてるはあはれをみなへし秋ふく風のいつくなきぬる

うちなびくいろにめけるはあきの野のかりほのをみなへしかれ

月前女郎花

ひかりそふ月の光のつゆのをみなへしやどもる月とこゝろおくらむ

胡女郎花

あけぼのにこえかよへて秋の世につましけるをみなへしかれ

野女郎花

秋の野はちくさにまじる花のなかにいつまをわきてつまとさるらむ

野径女郎花

こゝろなき人もこゝろをとゞむるをみなへしひとりたゝずむ咲にほふらむ

水辺女郎花

秋の野をなげきゆくひとのみてゆけへいとゞなまめく水のをみなへしかれ

はなミつゝかけをうつせる萩か枝へ おのゝたまめくはらや こほるらむ

萩

よるしほもあらぬかのはなハしをきハとかくなる萩ちりまねくらむ

なかりしのはいろものゝおハまてをかのそてのつゆにぬるらむ

萩露

秋のせのはらよもすからいはまくきつゆのむすハぬと萩もなれのな

ふきおやるゝのせのたえまにおちちえてやはらのつゆのたかのをきゝき

夕萩

ゆふされハはなをまつこえぬる萩をはなの袖につゆやおかれる

月前萩

秋のよの月をはやしこそをのゝへにしつまる萩のそて かゝらむ

野萩

はしさ萩つみもあへすほふいてゝそてのへまちらむ 色への萩をまて花

おきそへるつゆをしたみやはらふらむ 世への萩はきの袖をかへさハ

野径萩

をちこちにまねくのさかれハまきいつま萩ちのあるへとゝせむ

閑萩

萩のはなのちらなきはのはらきまねくや風のまたしあるらむ

をのゝへに萩たれこそれてまねくあり こゝろするやまのむつのおもふらむ

行路萩

おもひ人のいかにつゆけきゆめのあとや尾花のなみのまくらぬらすらむ

故郷薄

まねけどもひとしれずねかやまでゆくけふの尾花ハかひなきのみを

名所薄

わりさえていなみの原のすゝきしのひのねやかにハいつらむ

淺芽

秋ハまたつゆのやどりのあさぢはらつはらしにけふもみえたなし

路淺芽

あけちふのもちぶるにてゆく人ハいかにつゆけき秋をしるらむ

苅萱

かるかやのなにのはなのみみだるらむおのがのみなる秋ならなくに

苅萱露

このせふけハいかにあかぬる志らつゆのやどにみだるゝ野のかるかや

蘭

ぬぎかけしひとハあまそゝぎちハのまきさるたびにたつのまき衣

あきにぬぎこのせになびきこちかたかまれるひとをたかきらむすむ

野菜

このはるかく秋のゝにきしきちハのましなきハまで野にまよひぬるかな

故郷菜

ふるさとのあきさるひとあらなくによるはるとなくらむいかなるを

蘭薫風

なつのゝのしけみかくれて ぬきゝのにし めしあてけなるふちはかまかな

槿花

はかれたるつゆをたのみていはさのゝのはなのみそあはれなるつゆ

うるはしきいろにいてつゝあさかほのはかなきはいのちなりけり

秋きてはをれもあさかほのはなにさきてよもさけのなく

露底槿花

またかれやいのちはかなるしらつゆにたのみにあまるあさかほの花

野槿花

ひとりゆくのへにあはれなる秋の野にたちわかれけんのはなかるらむ

籬槿花

つゆしけきしはのまかきにまつはれてしはしのこれるいさゝ花のたれ

鴨頭草

いさそてにうつしてみはやつきくさのつきしきもせぬ野へのかへる

月前鴨頭草

秋のよのさやけきかけをつきくさのおのかゝけにやうつしぬるらむ

草花

いくいろにさくはなそならん秋の野のちくさの花はちたひこるらむ

月前草花

はきかはなをはなへの千くさにやとりてる月こそはなのあるしなりけれ

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24

ガラス使用

草花露

つゆふけておもやつれして秋くさのはなはゐやもくねられさりけり

おの〳〵のしゐてこゝろえのほかやはるかなり見るのちをまたれのしらつゆ

草花色〻

しらつゆのいろはひとつを秋の野のくさはちくさにいかにそむらん

草花交色

たなはたにこゝろくらむやちくさのいつれおとらぬいろにさくなん

野花

きてみれはのへはさなからやまとなる秋のちくさのはなのにしき哉

おほかたの野へにまくへるはなかたちはのいろにさきつゝなかめくらさむ

野亭留客

けさゆくもちよやまれてやちくさのはなにそれせにもくれなけそれ

秋花

いろ〳〵の野への花をなかむれは秋はいかにこそあはれなりけれ

秋花催興

たのしきはつゆおきそへよ月のけをやはらてまさる花のいろなく

露

うちあきのそのにあらすはつゆをきたるなみたをまかするあはれはまし

朝露

しらつゆのけさのひかりやまさからやはらしく月のなかにあるらむ

夕露

やちくさのつゆおかるれやゆふされはいきかへかのくなるこちしそ

夜露

やほちさへつきにやつれてしらつゆのあやなきやみにおきまさるらし

月映露

ひくのけふハ月もやとるしらつゆのつきにハいのそしたゝるらむ

秋のよはさやけきつきをまちかてゝおのゝひくのかゝこそる志ら露

月前草露

おきそへてさやけき月をまちえたるちくさのつゆそおくらかになる

風前露

秋の世ハいくたひかせにゆふつゆのちらハちらなんなからしかそれ

花ハみなたれにやとれるしらつゆそねあくやゝ世のふたゝひくらむ

閑庭露

やまてらのふけゆくにはにたへまなくひとこそみえてつゆおきそはるよなきふのにハ

野露

かてにさくるひとのきくひきの世ハみしらつゆにやとるあけはて

野露如玉

やちくさにおちそふの野におくつゆハにしきにつゝむたまのひかりかる

野径露

秋の野をとけつゝゆけハつゆしけみひろはぬたまそ袖にみちぬる

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24
ガラス使用

草上露

やちくさのつゆおきそめし秋の世ハしはのてらのこゝろなくあらなむ

けくれなからつらしゆふくれにをくゝさのつゆハつねにそ袖のぬるゝなる

笹露

よゝの世のあきぬる恋の袖やしとて袖のさゝきそのつゆそかゝりける

秋風

いつはかとひかれぬきて秋の世のことわれく人の身にはしむらむ

聞秋風

夕秋風

夜秋風

山秋風

浦秋風

関路秋風

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』 請求記号 836-24

ガラス使用

山家秋風

つゆにたにおもからむまつあたらその萩もしまくのかきふくなり

野分

このへしめるをもたれての野わけしき思せのををいふあはれなり

野分朝

よしのやまのまきたに萩をゝまらすきぬ行きのへふしおきかせそふく

穂にいてそあらはに似あるをしらぬ山のはなさくめぬよはのわきに

おきてみれはにのまきのなかよりのつゆそてならはさひしちくさのさき

けふまからのわたりをゆくみちのうたかたそはさく秋萩の花

尋虫

わけつゝもむしをあつめていさきの野のはなふのつゆにそてはぬるとも

たつぬるもあふせとのまつむしのやどはらのつゆにふしいをなく

夕虫

ひさかたにおなしとしるゆふくれをいつふせにかのむしのなくらむ

夜虫

よしらにすゝのみかけりともきからすゝのまくらにいをねのぬらむ

萩のはなふかくよはの風我しるこゑまつむしのこゑにほそれる

寒夜虫

いねのそふなきてやしつこのおもしまく秋のよわきのつきにふくなかし

寒夜虫

さむしろに秋のいく夜かつきふけてひえわたりぬるまつむしのこゑ

深夜聞虫

よはふけてきこゆるむしのこゑきけはやゝつきおちけんほそくなきゆく

暁虫

このよはすゝきしけのよもすからにねさめてきけるむしのいほのつきのこゑ

月前虫

めつらしきつきのよはしてあくせのなとかく鳴のかなしくなるらむ

よしやいつけやらなくに月きよみさよふけゆくまつむしのこゑ

風前虫

たつなみの袖にかゝいかむさよふけて世のしらぶるまつむしのこゑ

雨中虫

ふりそゝく秋のゆふへのあしさふにしめやかにむしもなくなれや

露底虫

秋の野のはらにぬつゆのしつくにもおもろともにすゞむしのなくらむ

虫声非一

やちくさはおなしいろそといはきの野のすゞむしいちとはなかれぬれく

満野虫声

ゆふ月夜けしきにひろきむさしのにはまちるせけるむしのこゑのな

故郷虫

いまはゝや世となるけふかなしきこのたのめし人をまつむしの秋

籬虫

秋の世にかきねのましはあれはてゝうらみかほなる虫のこゑかな

枕邊虫

なれぬるもわひしきよのきりきりすねさめかちなるよはのまくらに

虫聲近枕

まちかくもねさる人のゆめさまし手たまくらのしたになく秋や

旅宿虫

ふるさとを志のふよひのしのやきりきりすやとまやのまつむしの聲

虫聲入夢

まつむしのなくはのあさちかれかれにいつまて秋のねにかなしつゝ

松虫

ねさめするよるのまつむしのこゑきけはいかにはかなき人をまつらむ

鈴虫

わひさはひとりねのはかなき鈴むしのよはむしのねにこゑいてゝなく

蛬

かせさむみよたゝねになくきりきりすおのかねやさそやかふらむ

促織

志もさゆるよはゝはたおりやいそくらむたえゆるむしの聲そたえせぬ

寒虫

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』 請求記号 836-24

ガラス使用

ゆふきりのたえまや来ぬるをちかたにちかくきこゆるしかのこゑかな

鹿

夜鹿

朝鹿

よもすからつまよひかねてなくしかのゆくゑもしらぬあけほのゝそら

こゑおもきは秋のあはれをかたふけてしかのねなからのこるあさかな

夕鹿

ゆふくれのをのへのしかのこゑきけはよその秋さへあはれなりける

夕くれのゆきのまもあはれをそへぬるはしかのなくねのこゑの山かけ

夜鹿

さよふけてなくしかのねは秋ふかき月やまかけのしくれなるらむ

深夜鹿

秋のよのさよふけて山ひこのこゑすみのほるしかのねやむ

嘯鹿

やまのはにかたふく月をそゝやあはれとなくしかのねそするらむ

月下鹿

いさこのよのそらかゝるつきのかけにやまのをしかのあはれそふなる

つまこふるしかのねにさそはれてかたふくつきのかけをみるらむ

鹿声比風

深夜月

野麻

名所麻

旅宿麻

関路麻

山麻

深山麻

麻狭遥

麻狭何方

麻狭支方

麻狭寄夏

夜虫

うしゆゑハはの行きえて なまめかしむしのこゑのけはひしつゝのこゑ

晩蛛虫

秋望

海邊秋望

さひしさはあれなくのあつまあるうみつら哉しほやゝなきなつる哉

野秋望

なし人のまそけのかけをくゝふけて秋の野をかにまかてにほゆるたゆ

山路秋行

秋興

野旅興

田家秋興

うゑあをてをもハはりけるいねのるゆふきゐしまつる田つゝきれハ

山家秋興

秋夕

ゆふされのものかなしさにわすれてハころもひとつの秋とそおもふ

かなしさハあきのつねそとおもへともわきてかなしき夕くれのそら

きのえのふつるやまかけにすまゐせハ秋のゆふへにいかにはからまし　残

山中秋夕

野外秋夕

海辺秋夕

山家秋夕

稲妻

すゝきのしけきか中にいなつまのつゆのたまちるかけそ見えける

秋夜

ときのこゑやうつゝたえて秋のよハおとなしおもひもなくしみえる

秋夜寒

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24
ガラス使用

秋くさのしけみかなかによはるすゝ虫の声はよはりゆくをたのみにのうちかなしかる

秋雨

あきやまのいろつくあらしまたれけるまつうちしくれのこゝろをしらはや

小鷹狩

いねかてにかりをたつれはむしのねもかれてやおるし秋のはれまて

もちつきやこまを見てのちにふりやあふさかならのせきにいさるかな人

駒迎

関駒迎

月

くれたけのよのうちふしやきられてうちさとのはるゝ秋のよのつき

にしきよりひとしほそめのみねまさるかな月ひかりをとに

あまつかのみをおもへはすくなきをあかすみぬ秋のよのつき

秋月明

いかゝせのいろをまさせてしきのよはまたなきのつきのかけの下やさき

これしかのむつまもめて秋のよのつきはいつまさるらむ

待月

またぬるつきにはやてふはのみねにかゝりこゝろのこすなかな

野山待月

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』 請求記号 836-24

ガラス使用

はしのはるつきをなかめてやまをまつひとくものかかりはせさりける

見月

うたのはいくよふれともつきをこそみるしかのあらしのそらにすみまさるらむ

終夜見月

むさしのゝそのふのまつかけいつしかそのひかりをつきをこそみれ

説月

なかめつゝふねにはいつかたちわかれかはらのなみに月をみてつゝ

うつふうつをみやれはよものかはらにおくれてやあつきのかけのな

翫月

かなしさはそれとなけれはあきのよのつきになくさむ袖ならんかは

惜入月

いるつきのくもにかくれしつきならははるへきものをくものたえまに

十五夜月

いくよともかそへぬつきはあはれなるあきのなかはのつきにたくふしやは

たなはたは秋ちかくはなのえもまちつきのよはにおちえて

十五夜雨

たれもやとやるこゝろのはまちかきひとえていくひる月をまつらむ

よそなからこゝろはあめのつきなるをなかめはつきはあめふるらん

十三夜月

かちのよにはしはおくれていてぬれはおくれぬなかのつきのかくる

なくつれのそのみにおりゐのけしきなにくまて月をおもひこそみるらく

月前雲

はくふにはふいくひしあらぬをそおもひにおもふつきのうきくも

月前風

ひかりの雲ふきはらふあらしまてつきにちからをつくすよはかれ

月前露

おもへともせへのちくさにてるつきをやとしあらそふ露のしらたま

おくつゆのいろそはやくもけの露に月のけおつる秋のよはかれ

暁月

つきのけはほしのかけをさしてらのみさやけのわかるあかつきのそら

らまゝなたのけをえてつゆのはにほふからにくるつきをこそみるかれ

秋夜月

あきのよのかけもおしぬにあけよのつきはひとよのたのみならまし

つきのけのはやのたゝらまは秋のよのねさめをなにかあきなまし

晴夜月

なかれてるここよのくものいとつらをおもひのくまにみゆる月のかけ

陰夜月

むらひなるあめのや雲ありとけちこえいまはつくゝみのくつく

深夜月

やまさらのゝをかなくちそねふけぬやゝあらそてつきのいさよひぬらく

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24

ガラス使用

山月

さやけれはかけをさやかにやまの秋の月よしみよしのの山のおくなき

嶺月

みねにのこるいつくかあまりのみ山つたふかつらねのかけうつるらし

谷月

松たかのこのはにみえて秋のよのたにのねあらしにきゆるつゆのかけ

杜月

はやのたにさしいるつきのかけあれはもやもりのとかくきよくならん

松間月

かくれはにまとててらなん影になかいさへのそらのいろそめにけるつき

あさこのはる峰のへのつきのかけをまつ松のこすゑにほのみえのしなや

竹間月

あはれなるふしをはそたね くれぬけのたかつ つきのくまとおもひつ

野月

いくちふのかけをらくらむ見けし野辺の千草にやとる秋のよのつき

おほかたのちくさの露にふつかけはかほひつきの影もほのかなり

野外月

くまなきのなけはむさしののからやまそつきのまへにのこるなれ

野径月

つゆふかき野への小みちにやとりてそいはまはしるゝ秋の夜のつき

原月

おきこゆるをちこちのはらのしら露にかけさへまさて月そやとれる

岡月

秋のゝへ小たてるをかはふの袖のうへ小やとれる月をいかてまねかむ

橋月

つゆむすふ田中のはしのふみならしつきかけさへもつたふあさちをたのくらはし

いくあきのきみかゝるらむつきかけハいはひしむかしのまゝのつきはし

河月

うたかたハつゆなかれてきえつゝかみなかれゆくあさかはのなみ

名にたかきよきかはのたきつせにかけうつる月のかけをやとして

瀧月

いたしるたきのしらいとよるとみれはかけておつる月のかけなりけり

池月

てるつきをはらふかせやいけみつのさゝなみうつくかへらつきもなし

濱月

たつしほにはま辺のこつハ小かくれて小かはらぬものハ旅のやとのつき

江月

いりえてる秋のよまへのこつのあしたにかゝたてゝあるよはのつきかけ

海月

あきのよそなかめハふりさけみのはらやそしまかけて月のてらせハ

うなはらや八重のしほちにかすみちてくもまにきえてあはちしまのつき

濱月

あらいそによするなみのうへにうきし月ハくたけてくらむ

礒月

嶋月

まちえつる月をはやこよひそからあかしのとまや　おきつしまかせ

湊月

かすきよみきよするなみもしらたへのそてのうらなる秋のよのつき

浦月

ゆふしほにかよふやくもゐのふねまはてハなにのうらの月をはやしき

おきつかせよるへなき月ひのうら浪にやかてかへらぬ秋のよのつきかな

舟中月

けふのみるつきをかのせてきたのあをさふねハはてなくそけり

湖上月

あなのよのしからのおろしたけさはあふみのうみにつきのなこりかな

都月

いにしへのよハのしらへをめくりのたまのこやかのいまきの月かな

禁中月

いにしへにかはらぬおかくこやしのあきふらむつきのうちも秋ハかなし

古寺月

みやまの火ハいつしかたえてすむ月のかけをゝくるゝかねのふるてら

をはつせやふけゆくつきのねの松さうちあひてみねもみまつるなれ

山家月

よしやさるれとゝひこぬやまさとハ月こそおのかやとのまらうと

田月

おきかへつゆにやとりててるつきのかけにけかるゝ秋のをやまた

幽栖月

よもたふのつきをたつねてつきそはゝふきさとひとハえこそなかり哉

荒屋月

てる月のさはらぬあはれやとるかないへハひまなくもりさまさらに

秋月入簾

たまたれのをすのうちにもさしいりてさやかにみえてねにたのよのつき

故郷月

やへむくらはらハし志けきふるさとハなかなかもとのあきのつきかけの

関月

ゆきゝのなかるゝせきのゆくハゆくまもらぬつきのあかこそはやまほしけれ

いはしみのあけのまくらをゆくすゑやふはのせきもるいかきのかけ

名所月

まさこえの松さいくよのすさなれてゆきにあしおひの秋のよの月

旅泊月

月前旅

月前待人

月前暁更

月前晴

惜月

残月

月前遠情

[illegible]

雲月之志

[illegible]

月佳夜

[illegible]

月前祝

[illegible]

月前述懐

[illegible]

雁

[illegible]

初雁

[illegible]

関初雁

[illegible]

旅初雁

[illegible]

雨中雁

[illegible]

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24

ガラス使用

霧中雁

月前雁

つきかけのにほふ雲ゐをはるかにもかすかになきてわたるかりかね

はてもなくかすみにきえていつゝかりかねのつきのよそにかなしきをなくも

暁聞雁

旅中聞雁

海上雁

霧

朝霧

夕霧

川霧

こふれはふるさとのこゑもきこえて秋はあけかすゝこえぬ秋のうはたて

野霧

はきいてゝ月のいろのほのかさへの雨かをれるけさのしほたれて

山霧

こゆきゝのやまるしけさハ名にたかるかたのしらるゝかすむるゝなれ

山路霧

をちかたのたつをも志らぬ霧まよひておくつゆや杉のやまみちハ

関路霧

ゆふさりのやまおろしにたれ人のふるやまかせのしけるらの関

名所霧

擣衣

夕擣衣

夜擣衣

深夜擣衣

志ゆけゆるよはねさめさひしやいつくとも月にさゆらつちのおと

月前閑擣衣

ゆやけさたかし山のかけをふるさとの月はゝのけさにたかうつ衣

擣衣幽

ねさめきく松のあらしハさむけれとたえ〳〵のきぬたのあはれそはるけき

擣衣寒

つゆ志けきしたのしはさも月にふけてそらはすゝしころもうつ也

暁擣衣

里擣衣

ひはくるゝかつらのさとは月なからよしといくよきぬたうつらん

浦擣衣

山家擣衣

名所擣衣

鴫

暁鴫

月前鴫

沢水つれなきのこりいさしくこのはかきのよかくるゝつまもなし

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24
ガラス使用

鶉

夕鶉

野鶉

百舌鳥

重陽

菊

菓花盛

菓子

菓露

月前菊

草もきも月ひかりの見えせぬは残る菊の咲けるなりけり

残菊

水辺菊

霜

紅葉

もゝしきの花かあまたの秋のいろはちしほのもみちなりけり

初紅葉

紅葉浅

山紅葉

あき山のもみちのいろのそひぬまはこゝろ迄へふかくなりゆく

深山紅葉

遠山紅葉

紅葉満山

ちるまゝにやまかけさひしこれハ秋やはへしとまちるにまかせたるかな

夕紅葉

月前紅葉

雨中紅葉

うつろふもしくるゝそらにあらそひて下葉まてそむるもみちはのいろ

雨後紅葉

ちりのこる秋の山辺のもみち葉やよハのしくれのあとなるらん

霧中紅葉

山家紅葉

松間紅葉

社頭紅葉

紅葉
漲紅葉
惜紅葉
惜秋

霜月惜秋
暮秋
[illegible]
菅秋雨
菅秋月
聖菅秋

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24

ガラス使用

河暮秋

暮秋旅

山寺暮秋

九月尽

山家九月尽

秋夕

よひのまのほしさへしるくおきてみれははつしもしろきにはの浅ちふ

秋山

峨野

秋水

もみち葉をつみはやらてたかきのうかひてゆくあきのこつへれ

秋山家

ゑさちへて栈しの根なかるやまはやの秋はいくらかなしの

秋本

秋雪

秋旅

秋思

秋扇

秋祝

国立国会図書館　　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24

ガラス使用

百四十二丁

荻舎集巻四

連水行道

冬部

初冬

なくさめやる花山ハかれていつくもはるかしき冬ハきにけり

うき秋のなかめもくれぬぬるこの袖のしくれぬる冬ハきにけり

初冬木枯

去年のけふさそひもしまハ今まさにいかはかる木からしの風

夜時雨

いくつらとさきぬなるゝのはきかられたひゆめをおどろかしつゝ

時雨漸晴

はるゝかとみれはしくれのそらにまたこのはふきそふこなたの月のかけ

河時雨

うきなとのつくれの山ハのはきえてあやせの浪にしくれふるなり

山家時雨

やまはとハいくらさしきまほ木のはふくらおとしたしくれゝつゝ

閑居時雨

こゝろとめきくのこのはすさきたつしくれもつる袖もさしたれ

屋上時雨

よるふかきねさめの空もしらぬらしなきねのきゝしそれたるなり

時雨濡袖

しろたへのそてにこほれぬむらくれたちのこゝろにあめのゆつゝ

残紅葉

いく千とせのこすかきにしほちのまてなきのこすとかなしきものちらし

紅葉映橋

みやこ山やこゝろのこすあらしにもさそなかちらしそ

紅葉如綾

ちかきたるのゆのよもにとちしのゝつのしまはるはきのこし

ふかみよりあるゝなるそのときつりのあれなくきとちあるらむ

落葉交霰

よるもなほこの葉ふりしくおとなしてはしきにこゑはたえしあられ

落葉似雨

はらはらとつもりしまへにちるこのはあはれなよのねさめしきかや

あらしのこゑのよそのあさおちぬるにはにさへちりおちたる木葉

落葉ふ結風

はのみ世をいふたそのあさけはあらしまことそちりぬる木葉

風前落葉

おもひのままにちるかきたてぬきにちるもみちはちりたるにはたつきて

こ遠しよそならすてきかせふきはらふちりけるにけりちるもの

落葉随風

いつくともふかれてはなれてこすゑのあらしにさそはれてちるこのは

庭落葉

こをやまかせにさそはれてもみちのはつもりたるにふきよせて

山家落葉

やまさとは人もおとせぬいくとしをしくるるこのはちるやたえぬる

残菊

秋のころちりにしいまはふしきてのこりもまかきにさくのはなるらん

寒菊

よそさむくはかれてやむぬるにはのやまかけとひしかのこゑとなりにけん

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24

ガラス使用

草霜

名所氷

浦氷

澱氷

江氷

池氷

河氷

落氷

名所氷

浦氷

澱氷

江氷

池氷

あかつきの霜のしつくもたえてこほりつるなかの月のかけ

江寒葦

なにはえやあしのうらはの霜のうへにあらそふよるの志ら浪

湊寒葦

よる浪のおとさへかれはてゝ世にあしのはのみなとはけしからし

木枯

こゑたにもたちはなれし木のはのなかにつもりつゝ吹こからし

こと木のはもなくしのたちぬ木のはもなきこからしの風

枯野

花をつみしもえらぶとこゝにかなしき人にはなすかるゝ世への花

みえしゆきもこほるかせにふきまよひて入ぬる月のいろのみそらに

さえはてゝちるさくら木の末のしたにもなきのへの夜のは

霰

夜霰

花をはみしねやのさきにやまの世のならへにあられふるなり

野霰

志らつゆの玉ちる秋の野の草はいまはあられはらふらむ

寒千鳥

あまのかはなきかめくらきまてはまちとりよなたくふくらん

やとのよハふけぬるなかに鵆なくかたみのうらにかちわたりして

江千鳥

なにはかたうらはむらかけゆふしほにみちくる波にちとりなくなる

浦千鳥

あきつ風ふきのうらにゆふしほのみつのうらにちとりなくなり

ゆふされハ浦風さむみ浪まよりちとりのこゑもなかくかなしき

いさゝめのあしまのうら浪おきつしのゝはまさへなくちとり哉

湊千鳥

うちよするみなとのはまにちとりなくたつのまの浪かせそさむき

関路千鳥

せきもりのねさめかちなるなかきよにちとりなくなりすまのうらかせ

水鳥

あしまにていかにやすらんつるのこのなかにたゝやすむなり

夜水鳥

たかしまのあしのしけみにたつをしのよるのそらにやなくなり

寒夜水鳥

あはれにもよるのしもやさむからんをしのうきねのこゑそきこゆる

江水鳥

なにはえのあしまかくれのをしのこゝろのうちもさむけれ

衾

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24

ガラス使用

夕雪

夜雪

風前雪

雪深

雪似花

雪先春花

山雪

岡雪

たかをかのまつ葉をつゝむ白ゆきのゆふべのをかはけさのしら雪

峯雪

いまもなほきこゆる月の山のみねのしのをこえねのしら雪

雪満野山

はけしかりし風のやまもなし富士のしらたへの夜ほとる山のたかもなし

名山雪

しらたへをつねの名となる富士のねのあらさきらにさらすゝる雲のあなたの

野雪

いつくのをもかれのゆふへのちかのゆきの花ゆかくつもれる

まさらをあかの入江をうつみしてあらはれかゆるゝ人のゆふへの月

原雪

ちかふねのうみのあさゆきの原もみえぬしさゆき富士のかすみしらへから

山路雪

おもふ人のやまふかきにうつもれぬかたのやまをしるへとみる人のあゆみ

まつかえの人の跡さへうつもれてはしのきはるゆきのふるやまち

樵路雪

やましつのかよふみちをうつむゆきにかへりかゆく花とこそみれ

関雪

あふさかの山の関もりのあけさにてゆきのふるきしもたえぬ人

あさ日かけにほへるみねのへ見えてたまの玉さやとさき消しら雪

寒夜雪

いのちあれはことしもゆきにあひにけりこゆるはさのおいのらの世に

うちはらひたゆたゆきとりすへの君かつれぬいのちら消し寒

旅中雪

おし人のたまやとらんかたおもはへ行てなきの宿もひつなかやつ

水辺雪

なみつくしのはなくらくなからてかへる花やこそまるしら雪

海辺雪

とはのみ松やゆきふるらしきえてたるもしのはる二人のはしらそ

浦雪

志かのうらやひらの風ゆきふきてさやかの月へと志ら浪のこう

島雪

うきのたら志ほなかしあらてかの雪のたまやとみゆるおきつしま

名所雪

志らたへの雪ふりしきてまてくらくにあ君の見よし野の山

冬きても木々のゆきの花さかりたるみえる志賀の山もち

里雪

きやこれ里つもるかね井のふしきのはかつもるしら雪

まつ人のなかのゆきふる庭さえてさえぬらるこそやくさわけと

山家雪

ゆきふれはなをふみまよふやまみちにけふはとふらふあともなきかな

やまかけのまつはゆきにうつもれて人をとはしまつそたえぬる

深庭雪

うつもれてみちもなけれはゆきふかきあとつけむにはたれかこえなむ

禁中雪

ゆきふりてぬるよのやつはさかしらせよ花のみやのもろともにめせぬ

あつまちのかよひしきみの雪の上にかきくらしゆく

禁中初雪

このへのきよきやまのはけくらしへなふるゆきのしらゆき

社頭雪

このもとはおのへのまつのゆきなれや神のみまへにつもるしら雪

古寺雪

ゆきつもるいらかのしたのかねの音もふりぬるにこそおもひしられ

遠村雪

ゆふされはたえてみはかりつもれるあとにしもみえしをちのこの里

松雪

たちならふゆきの色にもあらはれていつもかはらぬ松のことのはそなく

このはちるときはもみちのいろをそへぬしらにそみるはおいのまつのしらゆき

松上雪

いつくまつ風やらん吹たえて枝もとをゝにゆきそつもれる

竹雪

くれ竹のとよやさきさゆくのへてもゝへてつもるしらゆき

雪中遊興

ゆき雲ハ野やまつゝみしのれはつねはいとはぬつもるこゝろか

雪中眺望

なかめしはやとほくさて志ら浪しら妙のとふ三保の松原

雪後眺望

見わたせは残つらしなかやま里のたかあられぬも雪のにはの

雪中遠情

やまはいとゝ雪はふりつもりおもひやる故郷はゆきのなかの庵を

ふしの根ハしのふもしらんよのつねの野山もつもるけさのしら雪

名にたかきふしのしはしのふならんいつこ山のえは志ら雪

雪中訪友

あらしつたてにすさはかけしまちてとしとつらへはゆきのへふかれ

雪中待人

ふりつもるやまちかみちを待まちし人もきこえやまもの雪のたえまを

雪中鳥

あはれむとちとりゆくなのへのつらゝはあつらゝのふるこゑのはたかの

雪中述懐

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』 請求記号 836-24

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24

ガラス使用

待春

除夜

冬池

冬海

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』 請求記号 836-24

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24

ガラス使用

836
3
24

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24

ガラス使用

ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24